

新町屑糸紡績所

長淳は養蚕試験研究と並行し、屑糸紡績所（絹糸紡績所）の設立にも参画します。屑糸紡績とは、繭から生糸を取る製糸の工程で大量に発生する屑繭や屑糸を原料とし、そこから糸を紡ぐことを指します。明治 10 年（1877）群馬県に新町屑糸紡績所が開業しますが、長淳は開業前から同所の所長を務めました（同 9 ～10 年）。この紡績所の建物は一部が現存し、明治後期建造のものも含む 5 棟が国の重要文化財に指定されています。

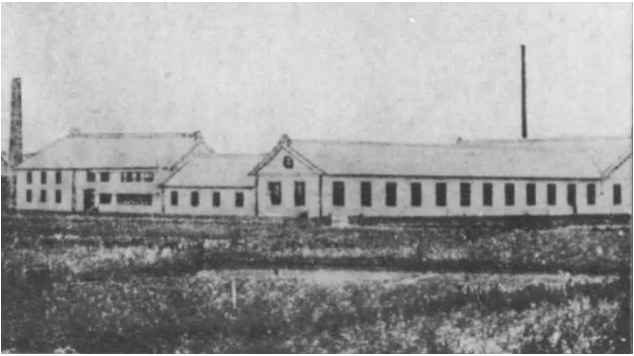


図 7 新町屑糸紡績所の外観

青山御所養蚕所での指導

明治 11 年に内務卿・大久保利通の暗殺に伴い、殖産興業策の方針変更が行われ、蚕業振興策も失速します。翌 12 年に内藤新宿試験場の敷地が宮内省に移管されて新宿御苑となり、長淳も宮内省に転出して青山御所養蚕御用掛りに任命されました。御所内に新設された御養蚕所において、同 19 年に 57 歳で非役となるまで、1 度の失敗もなく皇后御養蚕を指導しました。

万年会報告と巡回講話、著作

明治 16 年には民間の殖産興業団体「万年会」に入会して同会報告誌上で「蚕事通信」を連載。全国各地の養蚕家に養蚕に関する重要事項を発信し、また問答形式で養蚕家への質問に答えました。非職後は、各地を巡回して蚕業講話を行い、蚕糸業の発達を奨励するとともに、養蚕関係の書籍を数多く執筆、出版しています。

大正 5 年（1916）1 月 25 日、長淳は数え 87 歳、満 86 歳で肺炎のため逝去。長男の忠次郎は、帝国大学農科大学（現東京大学農学部）教授として、動物学・昆虫学・養蚕学の基礎を築き、長淳の業績を継承しました。

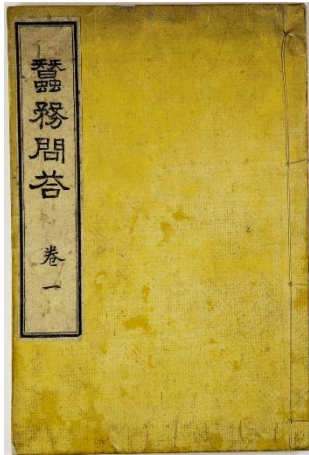


図 8 著作『蚕務問答』

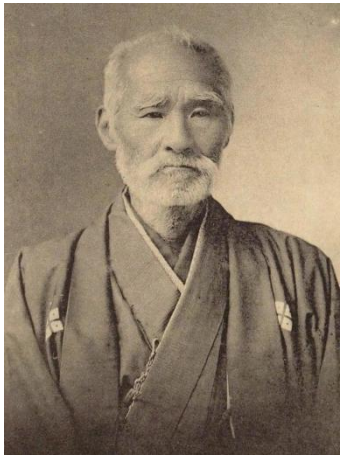


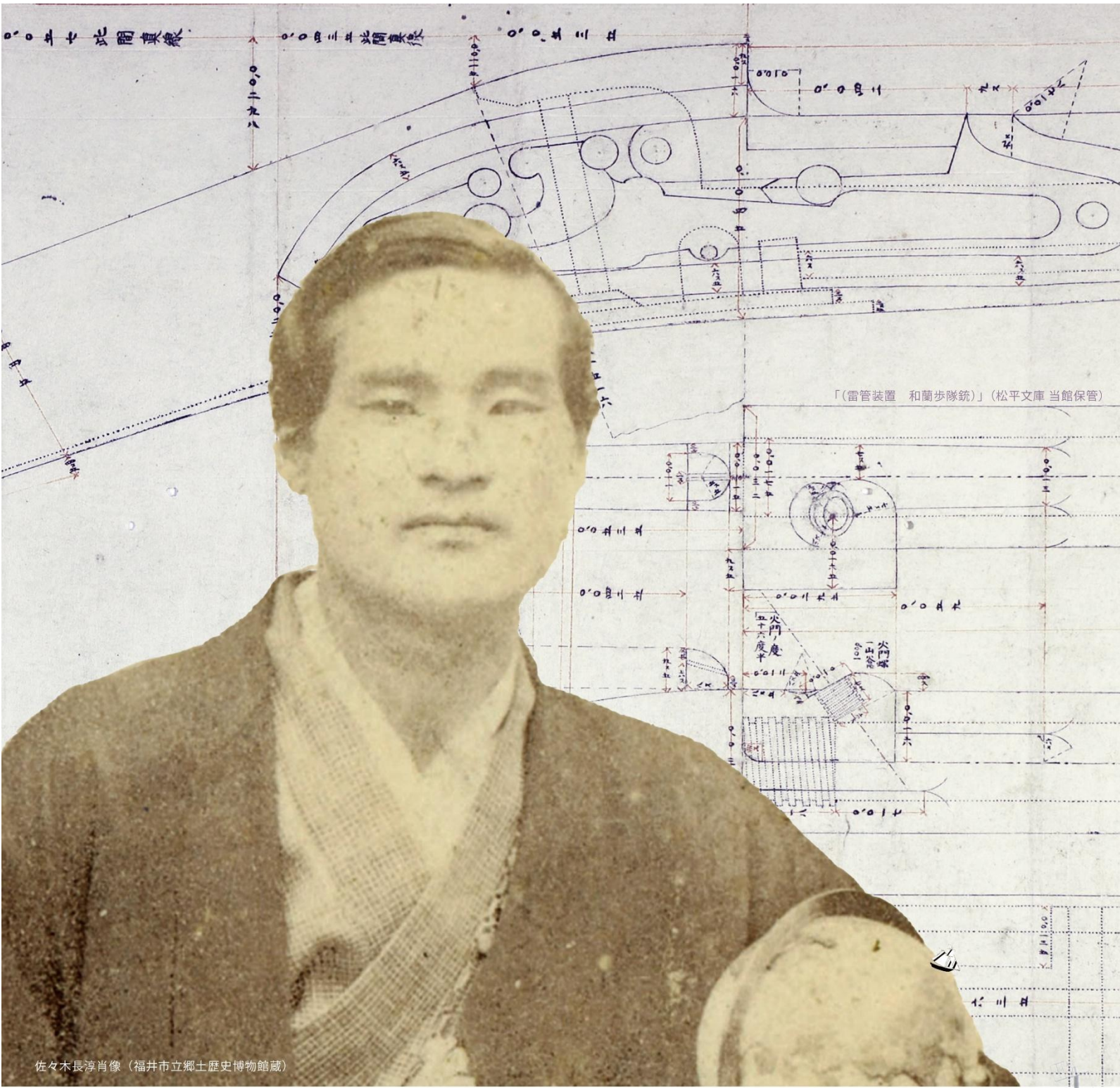
図 9 晩年の佐々木長淳

展示資料一覧

- (1) [A0143-00489「士族 六」](#)
- (2) [A0143-01028「給帳」](#)
- (3) [A0143-02633「福井藩軍制諸役心得書」](#)
- (4) [A0143-02479-018「嘉永 5 子年 7 月 23 日支合覚他」](#)
- (5) [A0143-02782「合同舶入相秘記 五」](#)
- (6) [A0143-01261「奉答紀事 中」](#)
- (7) [A0143-21089「シケイブスホウ軍艦図写」](#)
[A0144-55703「七種軍艦造法論」](#)
- (8) [A0143-01975「越前世譜 茂昭様御代 \(3\)」](#)
- (9) [A0143-02859-001「製造局御用品ノ内大砲小銃絵図類中拔萃」](#)
- (10) [A0143-02859-003「雷管装置 和蘭歩隊銃」](#)
- (11) [A0143-00514「御側向頭取御用日記 \(4\)」](#)
- (12) [A0143-01984「越前世譜 茂昭様御代 \(12\)」](#)
- (13) [A0143-01987「越前世譜 茂昭様御代 \(15\)」](#)
- (14) [A0143-02486「福井藩政治革記事」](#)
- (15) [A0144-07106「太政官日誌」](#)
- (16) [A0141-00164「官員録 \(明治 10 年\)」](#)
- (17) [A0143-02090「越前出官員録」](#)
- (18) [A1001-00083-001『蚕務問答』](#)

* (1)～(15)(17)は松平文庫・当館保管、(16)は坪川家文書・当館蔵、(18)は福井県立図書館蔵。

図版出典 図 1「合同舶入相秘記」（福井市立郷土歴史博物館蔵）、図 2「福井温故帖」（越葵文庫,福井市立郷土歴史博物館保管）、図 3「[越前世譜 茂昭公御代](#)」（[松平文庫,当館保管 A0143-01975](#)）、図 4「佐々木権六パスポート（邦文）」（福井市立郷土歴史博物館蔵）、図 5『澳国博覧会参同記要』（森山春雍,1897）、図 6『旧勸業寮年報撮要』（内務省勸業寮,1876）、図 7『絹糸紡績と屑物整理』蚕業新報社,1926）、図 8『[蚕務問答](#)』（[福井県立図書館蔵 A1001-00083](#)）、図 9『佐々木忠次郎博士』（佐々木忠次郎先生伝記編纂会,1940）。
参考文献 『佐々木忠次郎博士』（佐々木忠次郎先生伝記編纂会,1940）、土金師子「明治初期養蚕政策と佐々木長淳」（『史艸』48 号,2007）、友田清彦「明治の蚕業指導者佐々木長淳と「蚕事学校」構想」（『農村研究』101 号,2005）、長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」（『若越郷土研究』285 号,2008）、同「剣士としての佐々木権六-福井藩における「長剣術」導入との関連で」（『福井県史研究会会報』7 号,2014）、同「テクノクラート佐々木権六の幕末」（『幕末の福井藩』岩田書院,2020）、温井眞一編著『佐々木長淳の生涯と業績』（よみがえれ！新町紡績所の会,2014）、本川幹男ほか『幕末の福井藩』（岩田書院,2020）。



佐々木長淳肖像（福井市立郷土歴史博物館蔵）

企画展示

GONROKU

— “技術官僚” 佐々木長淳の幕末維新 —

解説リーフレット

令和7年5月23日（金）～7月16日（水） 福井県文書館閲覧室

佐々木権六は、文政13年（1830）9月3日、福井藩士佐々木小左衛門（長恭）と仕奈（品）の子として、福井城下に誕生しました。幼名は鉄五郎。後に通称を権六と改め、明治2年(1869)からは諱の長淳を称します。

佐々木家は、初代の大之進（長好）が松岡藩主松平昌勝に召し抱えられ、後に同藩が福井藩に併合された際に福井藩士となった家です。歴代当主の諱は「長」を通り字とし、長好、長之、長國（長舊）、長勝（長恕）、長恭と続き、権六・長淳は6代目にあたります。

剣術改革と剣術修行

母の実家が田宮流居合術師範の鰐淵家だったため、青年期の権六は剣の修行に励んだようです。松平慶永（春嶽）の意向で、藩に長剣術が導入されることになると、嘉永2年（1849）20歳の時に江戸に出て、直心影流・男谷精一郎の道場で剣術を修行しました。

同5年に斎藤新太郎率いる神道無念流一門が福井を訪れた際には、他流試合に臨んで勝ちを収めています。

砲術改革と砲術修行

嘉永元年、藩では西尾源太左衛門が西洋式砲術を教授し始め、権六も門人となりました。同3年に坂井郡泥原新保浦で大砲試放が行われた際には一耳砲を操作しています。同6年父の家督200石を相続すると、再び江戸での武術修行を命じられますが、修行の目的は大砲小銃の操練法・射撃法・製造法へと変更されました。

黒船来航と黒船探索

嘉永7年、2度目の黒船来航時に斥候（偵察）として浦賀に派遣されました。慶永が著した「合同舶入相秘記」には、権六が黒船に乗り込み、写し取ってきた甲板のスケッチが綴じ込まれています。

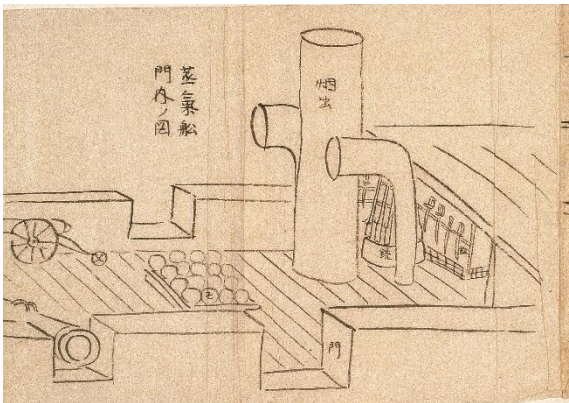


図1 黒船甲板の図

銃砲製造

嘉永7年、大小銃并弾薬製造掛りの1人に任命され、江戸で銃砲製造に関する調査に従事します。藩では城下志比口に設けた銃器製造部門を製造方と呼び、安政4年（1857）には28歳の権六と29歳の三岡石五郎（後の由利公正）を頭取に任じました。この製造方役所に鉄砲職人を集め、水車動力を用いて主にゲベール銃等を製造したようです。その後も製造局頭取、製造奉行、製造局司事、器械製造局司事など職名の変更はありましたが、権六は一貫して藩の製造部門を司る技術官僚としての道を歩むことになります。

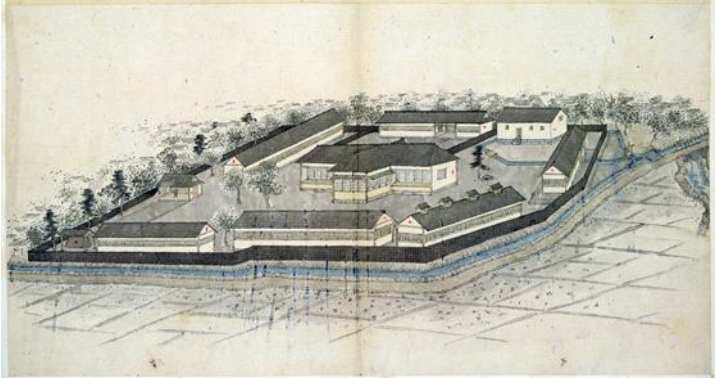


図2 製造局（製造方役所）

火薬製造

銃器製造と並行して進められたのが、松岡に設けた火薬所（火薬局）での弾薬製造でした。ここでも水車を動力源として製造に取り組みましたが、安政4年、5年の2度にわたり大爆発事故を起こしてしまいます。それでも明治初年には英国から取り寄せた火薬を手本に、弾薬の大量製造が可能になっていました。

洋式船建造

藩では通商と軍事に用いるため、コットル型洋式船の建造を計画します。担当を命じられた権六は、江戸での情報収集などを経て、独力でこれを竣工させたのは安政6年のことでした。全長20m、幅6.4m、深さ4.9m、16人乗りの船は「一番丸」と命名されます。

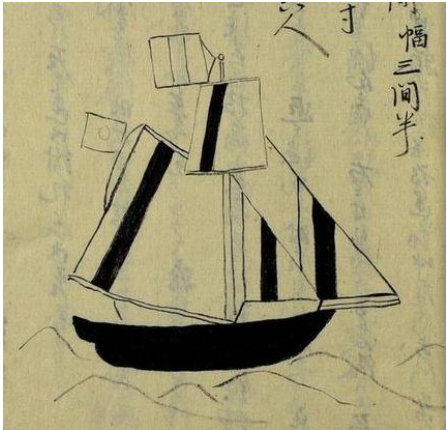


図3 一番丸

築港工事

文久3年（1863）藩では米国から購入した大型蒸気船「黒龍丸」の係留のため、坂井郡安島浦に波止場を築く計画を立てます。工事を一任された権六は家族で同地に引っ越し、難工事に取り掛かりました。東尋坊から大岩を切り出し、工事に用いたといいますが、完成を見ることなく明治2年（1869）に中止されています。

ビラスビイデ独行车

春嶽附側向頭取の「御用日記」文久2年2月6日条には、権六が江戸霊巖島藩邸で「ビラスビイデ独行车」を組み立て、春嶽がこれに試乗したとの記事が見えます。ビラスビイデとはvelocipede(初期の自転車)のことで、本資料は「日本で最初に自転車が渡来した記事」とされますが、三輪の可能性が指摘されています。権六の機械工学の知識や技術が発揮されたものと思われます。

渡米留学

権六は進んだ知識や技術を習得するため渡米を願い出、慶応3年（1867）38歳の時に英学修行中の柳本直太郎とともに幕府から海外渡航を許可されます。米国ではジョンソン大統領やグラント将軍と面会し、南北戦争終結後の余剰武器の大量購入や軍事施設の視察を認められました。約半年の滞在を経て、大砲やライフル、波止場の図面などを入手し、2台の織機（バツタン機）とともに福井に持ち帰っています。

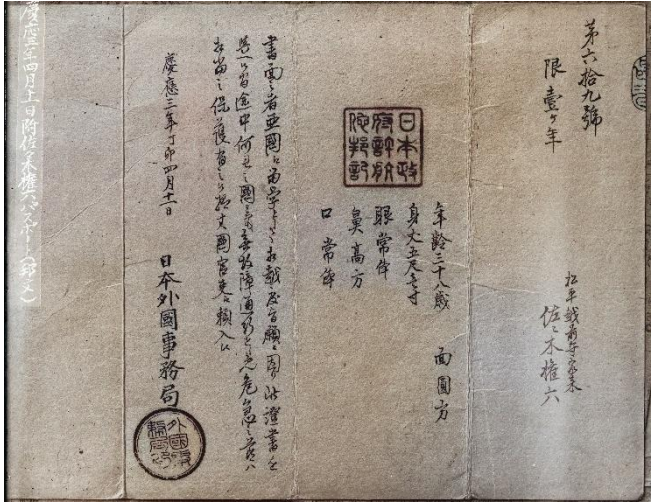


図4 佐々木権六パスポート（邦文）

葵町製糸場

明治4年の廃藩置県後、42歳の長淳は東京に引っ越し、新政府で殖産興業を担当する工部省勸工寮に出しします。翌年には建築に携わった東京赤坂の葵町製

糸場が完成し、同6年には操業を開始しました。富岡製糸場がフランス式製糸法を採用したのに対し、葵町では水車を動力としたイタリア式を採用し、小規模器械製糸工場の先駆けとなりました。

ウィーン万国博覧会

明治5年 澳国博覧会一級事務官にも任命され、翌年ウィーンで開催された万国博覧会に参加。同地では日本館の館外建築や庭園の整備等の監督を命じられました。また、滞欧中の余暇を利用し、オーストリア、イタリア、フランス、スイスを巡回して養蚕・製糸・紡績の最新の技術を調査しています。この時、顕微鏡や寒暖計等の道具一式を購入しており、帰国後、養蚕の試験研究にそれらが活用されることになります。

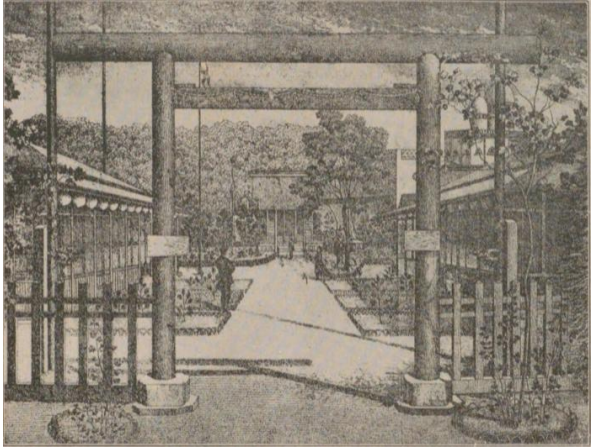


図5 澳国博覧会日本社園

内藤新宿試験場

明治7年からは内務省勸業寮に出仕し、東京の内藤新宿試験場で養蚕掛主任として試験研究に従事しました。同9年にはミラノ万国養蚕公会に出席して蚕の病気（微粒子病）について報告。翌10年には試験場長にも任命され（～12年）、蚕事学校設立を建言するなど、養蚕分野を牽引する農政技術官僚として活躍しました。

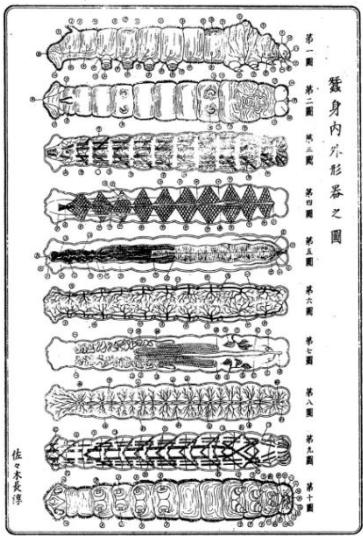


図6 蚕身内外形器之図